

洞察力 1988年 PHP研究所

中山 正和 (なかやま まさかず)

北海道大学理学部卒業。日本電々公社電気通信研究所調査役、日本楽器製造(株)企画室次長を経て現在に至る。元金沢工業大学教授。サイバネティクスと大脳生理学により創造工学を提唱。画期的な創造性開発法としてNM法、及び工学禪を創る。現在、創造工学研究所所長。「ちえ」の会、工学禪研究会を主宰。

潜在意識を解明する

[いのち]の脳だけで動物は「生きている」だけのことはできます。サカナやヘビ・カエルのような爬虫類は大体この程度とっていいでしょう。彼らはタマゴからかえったときから死ぬまで、ただこの[いのち]のプログラムにしたがって生きているだけです。生れたときにすでに親はいませんから、親の経験を生活に役立てるわけにはいきません。巨大爬虫類が絶滅した原因についてはいろいろの説がありますが、大きくなりすぎて環境に適応できなくなってきたそのときに、親の経験を受け継ぐことがなかったということもその1つと考えられるかもしれません。

そこで神さまは(というよりほか仕方がない)この[いのち]の脳にもう1つ、最も基本的な記憶の脳をつけ加えました。「基本的」というのは、われわれがいう意識的な記憶の前の段階の記憶という意味です。

トリは卵生ですが、タマゴからかえったヒナは目があいたときそのそばにいる、「自分より大きくて動くもの」を「親」として記憶してしまいます。そしてこのヒナは、成長して1人前(一鳥前)になるまで、この「親」のすることをほとんど習性として学びとります。この記憶は、ちょうど白い紙にインクで印刷してしまうように、もう一生変えることはできないという意味で「刷り込み」というのです。

ふつうヒナのそばにいるのは親鳥ですから、こうしてトリの親子の関係が成立するのですが、そうでなくて、ヒナの目があいたときにそばにいるのが人間であればこのヒナにとって「親」はその人であることになります。

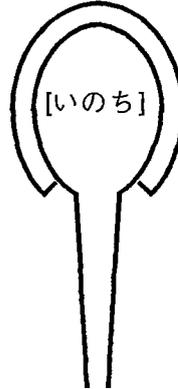
ローレンツという鳥類学者はこのことを身をもって確かめたので、たとえば、水鳥のばあい、この「親」がヒナが成鳥になるまでに水泳ぎを教えなければ、このヒナは水泳ぎさえできない水鳥になってしまうのです。

この「刷り込み」という記憶を受持つ脳の皮質を[刷り込み]とカッコをつけて表わしてみますと、これは本能という無意識、つまり[いのち]に非常に近いところにあると思われまので、図にすると第1図のように配置されるべきだということになります。

すなわち、ヒナは生れたときからすでに[いのち]という「生きている」だけのことを受持つ脳を持っているけれど、そのあと、親がする動作を「刺激」として受取って、「生きて行くためにはこうするもの」ということを[刷り込み]の脳に記憶して行くのです。

[刷り込み]

第1図



全く同じように、人間の赤ちゃんは生れたときにその[いのち]の脳は「生きてい」だけのことはしていますが、生れたあと(これは3歳頃までといわれています)すぐ、「生きて行くため」の、この社会のルールを、ふつうのばあい主として母親から[刷り込み]の脳にたたみ込まれて行くのです。もちろんこれはコトバではありません。赤ちゃんがその環境から受ける刺激によるものであって、ですから皆さんも3歳以前の記憶はないはずですが、無意識に非常に近い記憶なので、これをこの本では「潜在意識」ということにします。

なお、お断りしておきますが、「刷り込み」といういい方はトリについてだけのことという学者が多いので、人間ではこれを「幼時体験」というのが普通なのですが、私がとくに「刷り込み」というのは、脳のはたらきを「刺激」→「行動」(反応)という反射系としてとらえたいからで、そうすると原理的には幼時体験は刷り込みであると考えられるという理由によります。刷り込みといったところで何も人間の尊厳を害うこともあるまいというわけです。

もう一つ、「潜在意識」というのもいろいろ人によって定義がちがうのですが、[刷り込み]に入ってしまった記憶が、つぎに述べるように「意識しない好き嫌い」を形成すると思われるので、あいまいさを排除する意味で多少の困難はあるかも知れないが、これを潜在意識ということにしました。

[刷り込み]脳の不思議

自然界の動物は生れながらにして食べていいもの悪いものを識別する能力を持っています。彼らの[いのち]にそういうプログラムが組み込まれていると考えられます。が、人間の赤ちゃんはこの能力はきわめていいかげんで、3歳頃までは誰かが養ってやらないと生きることができません。つまり、これは食べていいもの、これは食べてはいけないものということを後天的に教えられて行くのです。何もいちいちその形や色で教えられるわけではありませんが、主として匂いや味です。それは、大きくなってからほとんど本能的に食べていいか悪いかを識別することができるように、この時期に[刷り込み]に記憶しておくということです。

ということは、この赤ちゃんが大きくなったとき、この味、この匂いが「好き」、そうでないのは「嫌い」と刷り込んで行くことでしょうか？ われわれが3歳以前の意識的記憶を持っていないという事実から、この好き嫌いは潜在意識的なものということ

ができます。オフク口の味といって、いくつになってもこの味、匂いは忘れることはできません。東北に育った人は塩からい味つけが好き、関西の人は薄味がいいのです。

コトバも刷り込みの影響を受けます。その土地で生れた人は一生その方言を拭い去ることはできませんが、3歳すぎたから(と、はっきりはいえませんが)たとえば小学校に転校してそこで憶えた方言ならその土地を去ればたちまち消えてしまいます。私など兄弟姉妹は小さいころ金沢へ引っ越したあと、小学校までそこにいましたから、金沢弁を使っていたことは事実なのですが、いまは1人として金沢弁の片鱗も話の中に残ってはいません。3歳までに金沢弁で育てられていなかった。刷り込まれていなかったわけです。

同じような理由で、1歳すぎから英語などをきかせておけば、別に勉強するわけではないけれど、大きくなって勉強するときそのイントネーションなどに苦勞することはないといいます。英語的なしゃべり方が、日本語的のそれと同じように「好き」と入るのです。

もう1つ、人間独特の刷り込みに「盗み」があります。自然界には他人(他動物)のものを盗んではいけないというルールはありませんが、われわれの社会では盗みはいけないことになっています。ふつうこのことは3歳以前にシツけられますから[刷り込み]に入ります。刷り込まれているから成人したあとでも盗みをしようとすると心臓がドキドキし、脚がふるえるようなことが起きます。いくらアタマで「絶対見つかることはないのだから平気平気」なんて考えたってカラダの方がひとりでいなるのです。[いのち]に密接した[刷り込み]に入っているからそうなのです。われわれは(ふつうなら)盗みは「嫌い」と潜在意識的に思っているのです。

よく、何回つかまってもスリをはたらくような常習犯がいます。スリに限らないのですが、たまたま3歳頃までに人のものを盗ることが当り前だという雰囲気育てられてしまうと、この人にとっては盗みは潜在意識的な「好き」に入ってしまうということなのです。

民族によっては、人のものを盗っても、みつかったときに返せばいいという考え方もあるし、盗っても別に悪いことはないというのもないわけではありません。要するに幼い頃、お姉ちゃんのアメチョコをとった、そのときピシャリとやられたかどうかできることなのです。[いのち]に与えられる刺激によって刷り込まれるのですから。そうして、このときの刺激の強さは感覚器官から送られるインパルスの数で表わされます。

つまり、強い刺激を1回与えることと、弱い刺激を何回かくりかえして与えることは効果として全く同じことなのです。このことは大人のばあいだって成立しますし、肉体的刺激でなくて一般の記憶でもそうです。皆さまよく経験されている通りのことで、子どものシツケでも会社の教育でも、この原理をどう使い分けるかにかかってくるのです。

アタマのよしあしは遺伝であるということがよくいわれます。私の経験では、企業や、とくにお役所のトップは一般に口では部下の創造性などということはおっしゃるが、本当は、できる奴はできるし、できない奴はできない、創造性なんて開発することはできない、と置いていらっしゃるといわざるを得ないのです。一方、松下幸之助

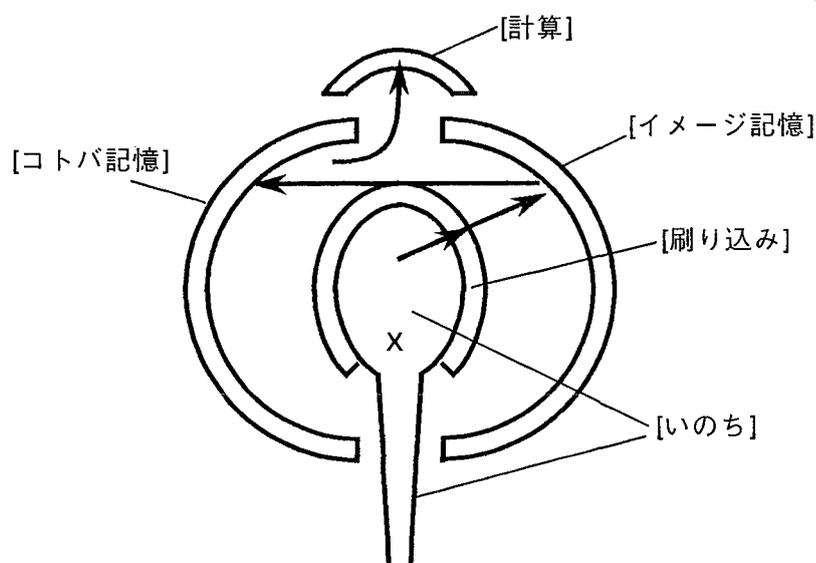
氏、井深大氏、本田宗一郎氏をはじめ、何人かの優れたオーナー経営者の方々は、部下の創造性を開発しなくて経営がうまく行くはずがない、それこそが企業を成立させるのだとはっきりいわれています。

人間のアタマは生れながらにしてその知能に関するかぎり有意差はありません。生れてからの刷り込みが問題なのです。学者の家庭に育ったら本を読むのが好き、絵描きの家で大きくなったら絵を描くのが好き、ということになるだけのことです。この刷り込みを無視した教育をするから「やる気」がなくなってしまう。潜在意識の「好き」を殺してはいけません。

直観の脳メカニズム

人間の脳は動物の脳から発達したものだということから、いままで述べてきた[いのち]と[刷り込み]の脳を[イメージ記憶]および[コトバ記憶][計算]の脳を組み合わせてみます。そうすると第2図のようなこととなります。矢印は発達の順序です。まず[いのち]があって、これはサカナやカエルの段階、つぎに[刷り込み]と[イメージ記憶]、これがトリケモノのクラス、そして人間になって[コトバ記憶]が現われ、そのコトバのコトバとして[計算]までが完成したという意味です。

第2図



そこで、先に考えたように、われわれの洞察力ということは、コトバによって「計算」したり、[コトバ記憶]を介してイメージをひき出したりすること、つまり「分析」したりすることだけではうまく説明することができなかったのですから、ここで1つ、これに加えて[刷り込み]の潜在意識や[いのち]の無意識のはたらきも考えてみなくてはならないこととなります。

たとえば、コトバによって理づめに考えるのは[計算]と[イメージ記憶]の間の信号交換であるけれど、そこに[刷り込み]がはたらいていると、その判断の中に潜在意識的な好みが入ってくるのではないか？あるいは、もし[いのち]そのものに「進化」という無意識のプログラムが組み込まれているとすると(このプログラムは科学では分らないからXとしておきます)、このはたらきがわれわれの「生きる」という営みに

予知的判断を与えることもあり得るのではないか？

こういうことから、分析脳に、動物脳をいきなりつつ込んだわけですが、その関連はどうなっているのか、[刷り込み]と[イメージ記憶]のつながりについて考えてみます。

前にもお断りしましたように、人間では第2図の順序で大脳皮質が完成して行くとははっきりいえません。たとえば、[刷り込み]は生れてから3歳頃までの記憶を受持つとはいいますが、それでは[イメージ記憶]も[コトバ記憶]もはたらかないのかということではないでしょう。3歳ともなれば相当のおしゃべりはしますし、いろいろなイメージ記憶も持っています。だからこれくらいの幼児でもそういう脳がもうはたらかしているともいえるのですが、しかしその記憶は大人になってからではもう意識的に引き出すことはできないということも事実です。

あるいは、幼児はこの時期にいろいろトライ・アンド・エラーによってイメージやコトバを試してみながら、[イメージ記憶]や[コトバ記憶]を組立てているのかも知れません。コンピュータでいえばそれを記憶回路として使う前に、使いやすいように配線しているようなものですが、これもよくは分かりません。それより、そういうことは考えないで、大人の脳として1人前に使うためには第2図のような5つのはたらきを受持つ大脳皮質があればいい、それだけのことと考えていただきたいと思います。

そこで、トリ・ケモノでも人間でも、[刷り込み]と[イメージ記憶]を持っている動物は、1人立ちできる頃になれば、というのは保育期間をすぎると積極的に自分の経験したことを[イメージ記憶]に記録して行きますが、このとき人間だけはコトバの方も記憶しますから、前に述べたオバケのように、[イメージ記憶]にあるイメージが必ずしもこの目で見、この手で触れた真実のデータではなくなります。トリ・ケモノはこの点がちがう。彼らのイメージ記憶は確かに彼らにとって真実のデータなのです。コトバによって妨害されてはいません。

妨害というのは、元来この[イメージ記憶]というのが、過去の体験を記憶しておいて、何か新しい環境に遭遇したときに自動的にこの記憶を引き出して行動し役立てようというためにあるので、コトバによってオバケのようなウソのデータを作ってしまったはそのときの判断に誤りが出てしまうということです。

トリ・ケモノではこういうウソのデータの入る余地はないので、そのときの[イメージ記憶]の上のイメージ配列の仕方を「自在」と名付けます。自然に在る、または自在なまま、という意味で、自在にあれば事に当って[いのち]がその中から直ちに必要なイメージを観る。探し出すことができるのです。これが「直観」ということです。

ところが、[イメージ記憶]と[いのち]のあいだには[刷り込み]があります。この刷り込みはほとんど無意識に近い潜在意識的な好き嫌いをきめていますから、たとえ[いのち]が過去の経験を自動的に[イメージ記憶]から探し出して、これを行動に役立てようとしても、[刷り込み]にそれが嫌いと入っているばあいにはこの行動は抑圧されてしまうこともあります。幼児期にドブに落ちてひどい目にあったりすると、大きくなってからそのことはもう忘れていたとしても、トッサのときにドブを跳び越すことができないというようなことが起こるのです。

このように、[刷り込み]と[イメージ記憶]はいわば力関係にあるようなもので、イメージが非常に強くなればあたかもそれが刷り込みであるかのようにはたらかします。

し、刷り込みが強ければそのことに関するイメージもまた強化されることとなります。

洞察の構造は悟りの構造であり、発見の構造だ！

ここまで来ると、洞察ということがほぼハッキリつかめたように思われます。それは予測や予知とは一寸ちがう。それは、「真実のデータに拠って、いま自分のとるべき態度が自動的に決まる、そのことを理性によって確認することである」ということではありませんか？

[イメージ記憶] (右脳)に、この目で見、この手で触れた真実のデータがあって、これが自在に配列されていれば、[いのち]は新しい状況に直面したときに自動的に(直観)その中から過去の経験をひき出して、そのとき採るべき自らの行動を決定します。ウソのデータは入っていませんから、この判断は宇宙プログラムに適合します。したがってまず「まちがい」ない、絶対にまちがっていないとはいえないが非常にまちがいは少ないといっているでしょう。

ここまでは[いのち]⇔[イメージ記憶]という、いわば脳の動物系のはたらきです。トリケモノでもそうしています。が、人間は理性を持っています。理性、つまりロゴスはコトバによって現われるものです。動物はいまの直観を行動に直結しますが、人間はこの理性によってこの行動を確認します。たとえ直観的にそうすべきだと思ってもそうしてはいけないこともあるでしょう。そういう理性的思考は知識によるものです。もし、その知識が「完全」であるならば、この人間の理性の判断によっていった「まちがい」は絶対になくなってしまいます。これこそ完全な洞察ということになるでしょう。

知識が「完全」であるということは「全知」であることです。全知は「神」、ザ・ゴッドです。キリスト教の哲学はここからはじまります。「太初にロゴスありき」というのは、はじめに理性の光が闇を「照す」のです。神は宇宙創造に際して、「光あれ!」といったらそこに光が現われた。「意志」があればそれが実現する。仏祖の光明があって東方18,000の現実が照し出されるのか、神の意志があって世界が作り出されるのか、これは結局は同じことではありませんか？

どうも話が宗教くさいと思われるなら、科学における洞察はどうかと考えてみましょう。

科学はキリスト教を基盤において発達したものです。神を信仰し、神を愛するために、神の創り給うたものを「知る」ことからはじまりました。神の全知にいくらかでも近づくことが神を愛する所以であるのですから。そのためにはコトバによって「分析」する。既得の知識で理解できる範囲はそれでいいが、誰もまだ知らなかった領分は自分の、この目この手で確かめなくてはなりません。実験し探検をするのです。そしてその真実のデータからある「法則」を見つけ出そうとします。観測したデータをただ分類整理するだけでは科学にはなりません。これらのデータをいちいち見なくても、ある法則を求めさえすれば、つぎの同じような現象は観測しなくても理解することができるのです。この法則を見つけることが「発見」です。

この「発見」は知識ではありません。知識だとすれば神の知識です。この知識のことを神の「英知」、知識をいかにうまく使うかという知識、知識に英でた知識なので、英語ではwisdomという。人間には英知が欠けているから(全知ではないから)科学者はふつうの分析だけからは発見することができません。考えに考え抜いて、考えるタネがなくなってしまうと、どうしようもなくなったときに、あるとき突然神さまが援けてくれます。これがインスピレーションであって、それは自分が理性をはたらかせて考えているときにはやって来ない。理性が眠っているときに「与えられる」のです。

フランスの大数学者ポアンカレは、この「発見」について「発見は理性の活動なしには起こらないが、それは理性が活動しているときではなく、理性的活動が終ったあと、大分経ったあとのことである」「そして、この発見の瞬間には一時にすべてが分ってしまい、しかもその発見はまちがいないという確信がある」といい、さらに、「この発見は理性が予測した枠外にある」とつけ加えています。

[イメージ記憶]の中にいくら真実のデータを蓄えても、そういう知識では発見ができない、これにwisdomという英知が光をあててくれないと法則にならないのです。

ところで、このwisdomをわれわれは「知恵」といいます。われわれは全知にはほど遠いけれど、それでも発見ができる、その発見は仏の知恵による、ブラフマンのケラ(X)がわれわれの[いのち]の中にあるからだと考えるのです。道元の「拳頭を中心」です。これが[イメージ記憶]の真実のデータを理性の光に照し出されるようにするから発見できるということです。

いうなれば「神の導き仏の後押し」なのです。「結果として」どちらから考えたって同じです。「どちらが好きか?」ということなので、これは[刷り込み]のはたらきになります。

いずれにせよ、発見は「それが理性の予測の枠外にある」ということは、リクツで「その結果こういう法則が得られるだろう」と考えたような結果ではないのであって、それは自分の意志ではない、どこからか「与えられらもの」なのです。神かもしれないし仏かもしれません。どちらでもいいのですが、しかし、その発見は「真理」でなくてはなりません。それが真理であることはその発見が行われたあとで証明されるべきものなのです。つまり、その発見が真理であることを科学者は証明される前にすでに「洞察」していたことになるのです。

道元禅師は『正法眼蔵』の中の「唯仏与仏」の巻でこう書いています。

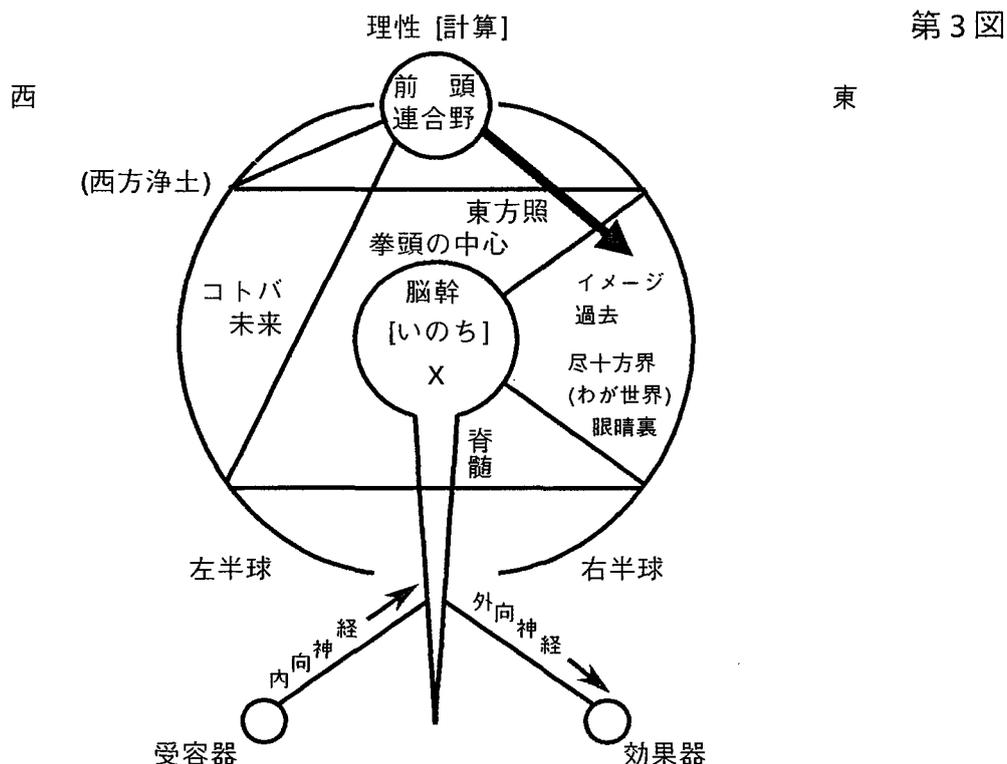
「それ(仏法)をきはめるとき、われながらも、かねてより、さとりととはかくこそあらめと、おもはるることはなきなり、たとひおぼゆれども、そのおぼゆるにたがはぬさとりにてなきなり。さとりもおぼえしがごとくにてもなし」

自分で悟りとはこういうものであろうなどと思えるようなものではない。たとえば思ったとしても実際には思ったようなものではない、と。まさにポアンカレの発見と全く同じことではありませんか?

科学の発見も悟りもその構造は同じだということです。真実のデータが[イメージ記憶]に自在におかれているのです。ただ、発見のばあいはこれがその問題だけに限られているのですが、悟りのばあいには世界全体(つまり[イメージ記憶]すべて)に及んでいるというちがいがあただけだと考えられます。

こういうことになりますと、われわれは洞察力などと簡単にいうけれど、最高の洞察とは悟りをひらいた人でないと分らないほどのものだと「察する」よりほか仕方がなくなります。ここにいう「唯仏与仏」とは、ただ仏が仏に与えることができるということなので、凡夫には分るべきことではないと道元はいいます。

この辺のことをイメージ的にまとめたのが第3図です。洞察の構造はお分りいただけると思います。



ところで、[イメージ記憶] (右脳) の中に「真実のデータ」を置きさえすれば直観の判断にまちがいはなくなるといいましたが、しからばどうして真実のデータだけにとどめておくか？ ということになるのとまことに難しい。トリ・ケモノがそうしているのに人間はコトバによってこの「自在」を乱してしまいます。キリスト教の哲学はあくまでも理性で考えていこうとしますが、仏教の哲学では自然の姿に立ち帰ることをすすめます。法華経のイメージでいえば、西洋流では先にお釈迦さまの「白光」があるが、東洋流に考えればまだ白光に照されない前の東方18,000の世界が「動いて」いることになります。脳モデルでいえば[計算]の脳から[イメージ記憶]をコントロールしようとするか、[いのち]で[イメージ記憶]のありのままを見ようとするかのちがいです。

しかし、私がいうのは、西洋流は全知でないとできない、少なくとも全知に近づく強烈な意志力がないと難しいが、東洋流なら知識レベルは必ずしも高くなくていい、極端に言えばイヌのレベルでも問題(そのレベルでの)は解ける、ということです。

大哲学者は人生上の問題を解くことができるでしょうが、そんなに知識レベルが高くなくても人生を楽しく生きることならできる。学者でも悩み多き人生を送る人もいるし、市井の平凡人でも悩みなど一切吹っ切っている人もいます。われわれは凡人としてできる方法を考えてみようというのです。

とはいえ、これがなかなか難しい。難しいわけではないが難しい、という奇妙なこ

とになるのです。禪の坊さんは悟りなんか君の目の前にある、何でも無いというけれどそういわれた本人はどうしても悟れない、そういうことです。